

「けいさんめいじんをめざそう たしざん・ひきざん」

1 提案の主張点

自力解決では、ブロックやアレイ図を使って考え、ペアや学級全体では説明する場を設けた。ペア交流では、自分の考えを確かなものにし、全体交流では、違いに気付き高め合えるような学び合いを大切にしたい。

たしざん

T・Tで授業を行っている。T1は全体指導、T2は消極的な子への促しや、意欲や理解度に応じての個別指導にあたった。加数分解と被加数分解を比べて、便利さを実感させ、数感覚を養っていきたく考えた。

ひきざん第2時

減加法と減減法のよさを感じ取らせるために、1時では様々な方法を出していった。『数えひきと減減法』と『数えひきと減加法』を比べた。計算の習熟を図る時間を3時にとっている。念頭操作を言語化していき、問題に応じて、二つの方法を使い分けると便利だ。

ひきざん第4時

第2時の13-9では、ブロックを使って減減法をする子供は、3人だったが、本時の13-4では、11人に増えた。練習問題でブロックを使う子供は少なかった。たし算では、被加数分解と加数分解では、どちらがやりやすいのかを1年生なりに高めていった。本単元では、減加法と減減法を比べ、次の念頭操作へとつなげていくのだが、数によって計算方法を考えていくことは、やや難しかった。

2 提案に対する意見

Q：本時のT・Tの役割分担は？

A：話す、聞くなどの学習規律に力を入れて、1学期より、一斉指導をしている。特に遅れて進む子供があまりいないので、態度面で気になる子供を主にみてきた。ペアでの話し合いでは自分の考えが言えていたが、よさを気付かせるための練習問題についての話し合いでは時間も不十分で、うまく発言できていなかった。

Q：ワークシートには、10の枠が印刷されていた。6の取り方が色々だったので、同じ6を取っていても、違うという意識だった。約束はどうなっていたのか。

A：取る時に順番に取るようには指導していない。同じ所はどこかなと、違う所と同じ所を見つけるのも一つの考え。1年生特有のこだわりがあるため、同じ所

と違う所を納得しながら作り上げている。

Q：13-9を12-7にした理由は？

A：数えひきと減減法を比べさせたかった。9だと減減法が出にくいと考え12-7に変えてみた。

司会：減減法は、差が少ない方が有効である。

司会：お互いに話し合い、学び合うためにブロックを使っての算数的活動をしているのだが、1年生にとっては難しい。

A：たし算の4時間目では、答えは出ているが、頭の中の整理ができておらず、話し合いの場を十分にとったつもりだったが、時間不足だった。図や言葉もできているのだが、うまく表現できない。算数的活動を通して、表現力をつけていきたい。

Q：互いの意見を出し合い練り上げていくことが大切。話型を学校で統一して共通理解しているのか？

司会：指導案集P13、P18にも説明がある。

A：授業の中で子供達が説明し合う時やお互いの理解を深めるときに使っている。

Q：10のまとまりからひくよさに気付かせたいという目標が達成できなかった子供はどれくらいいたのか？

A：3名程いた。習熟の部分（練習問題）が十分にできなかった。問題に合わせて減減法と減加法を使い分けた子供はおらず、難しかった。

司会：減加法で進めたのに、減減法を最後に出していくのは難しい。1時で出た子供の考えを出してもよい。

3 御指導

話し合いによって数学的思考を高めようと前向きだ。楽しく自主的に話し、考え方を文章化させる。聞く姿勢がよく、反応してくれるので、自信を持ってペアや全体の場で発表ができる。

説明の不十分な子供を理解し、操作を追体験させて、理解させる。ブルーナは、「映像と操作の一体化で理解できる。」と言っている。考える手立てとなるものを机の上においてほしい。手遊びの中から考えていける。

直感力 違う所から反応していき、最後は同じところを見つけていく。

操作を通してのよさと抽象を通してのよさは違ってくる。説明の図と答えを出す時の図は違ってくる。

速く10の束を作りたいという意識が大切。

指導と評価の一体化。C Bに持ち上げる手立て。

ひき算は、解決しなければならない世界の代表。念頭で一瞬に答えを出す訓練が必要。子供の目が止まっっていてよく指導されていた。